政治と教育の狭間
――移民国・ドイツの自己像と他者像[1]――

渡　邉　紗　代／ベティーナ・ギルデンハルト

序

「ドイツ的」な文化とは何か、あるいは、典型的な「ドイツ人」とは何か。ドイツにおける移民と「統合」について語る際、この問いは必ずと言ってよいほど付随し、議論が絶えることはない。例えば、2000年に端を発した主たる文化（Leitkultur）論争[2]はその代表的な例である。移民にドイツの「主たる文化」を身につけさせる、というフリードリヒ・メルツ（Friedrich Merz）の主張[3]からもわかるように、ドイツでは移民と「文化」は切り離して考えることができない問題として扱われている。この論争の争点のひとつでもあったが、ドイツの「主たる文化」とは何を指すのかということが活発に議論されるものの、最終的に明確な結論に至ったことはない。論争の原因となる発言をしたメルツ自身でさえ、その内容を具体的に語ることはなかった。この論争から10年後、新たにザラツィン（Sarrazin）論争[4]が世間の注目を浴びることになった。それぞれの主張は言葉や表現が異なるものの、結局これらの根底にあるものは、移民をどの程度までドイツに「同化」させる必要があるのかということである。ところが、どのような「ドイツ」に、あるいは、どのような「ドイツ文化」に、「同化」させるのかは明示されず、「移民をドイツに統合する」や「移民をドイツに同化する」という議論が繰り返し行われている。

しかしその一方、2005年に設置された移民のための統合コースで使用されている教材では、特定な「ドイツ像」を見ることができる。つまり、「ドイツのあるべき姿」について、政治的な言説空間ではいまだに議論が行われて

『言語文化』14-4：401－428ページ　2012.
同志社大学言語文化学会 ©渡邉紗代／ベティーナ・ギルデンハルト

いる一方、統合コースのような「教育現場」では、すでにある種の答えが出されている。そこで、移民問題の中で語られる「ドイツ」とは具体的にどのようなものが想定されているのかを探ることを目的に、「ドイツのイメージ（Deutschlandbild）」を考察していくことにする。また、政治的な言説空間における議論を概観したうえ、統合コースで使用されている教材を分析する[5]ことによって、両者に関係性があるかどうかを探ることも本稿の狙いのひとつである。「評論」のレベルと「教育現場」を絡ませ、次元の違う二つの側面を対比することによって移民国・ドイツをより多角的に見ていきたい。ドイツ人によるドイツのイメージ、つまり「自己像」を調査するにあたっては、「他者像」との相関関係を視野に入れることが不可欠であるとの考えから、第Ⅰ章において、「評論」の中で「自己像」と共にどのような「他者」が想定されているのかを分析していく。第Ⅱ章では、教育現場で「自己像」と「他者像」がどのように構築され、伝達されているかを調べていく。

Ⅰ. 評論のレベルにおけるドイツの自己像と他者像

2009年のドイツ連邦統計庁による統計[6]によると、ドイツの全人口約8190万人に対して、約1570万人が移民を背景にした人々（Migrationshintergrund）である。このような移民国・ドイツでの他者とは誰が想定されているのだろうか。まず、主たる文化論争において想定されていた他者像を見てみよう。メルツはドイツの「主たる文化」を「移民（Zuwanderer）」に身につけさせると発言している。つまり、ドイツの「主たる文化」を身につけた人々が形成する国家こそが「ドイツ」であるべきだとの主張である。移民とはドイツの「主たる文化」を身につけていない人々、つまりは他者であり、「異文化」を背景にしている人々が想定されているように、ここでは文化を基準に自己と他者を区別する意識が働いている。メルツの主張には、「他者像」を明確に描いているというよりはむしろ、「主たる文化」を身につけた「われわれドイツ人」という自己像が前面に押し出されているように見ることができる。

では、主たる文化論争で想定されている「ドイツ人」の自己像について考えてみよう。ドイツでは、2000年当時与党であったドイツ社会民主党（以下SPD）を中心に多文化主義の主張や文化的多様性を認めようとする動きが主

流であった。例えば、主たる文化論争が起こる以前ではあるが、ユルゲン・ハーバーマス（Jürgen Habermas）が多文化主義に関する論説の中で、「ドイツの移民問題を処理する方法における欠陥は、言語や文化を中心とする『民族同胞』というドイツ人の国民としての自己理解に照らして理解されなければならない。[7]」と述べている。さらに続けて、「ドイツでは、それは（国民意識）ロマン主義に活気づけられた中産階級の『文化国家』という観念、つまりドイツの文化によって想定された国家という観念に最初から結びつけられていた。こうした理念はドイツに存在していた小国家の乱立という現実を乗り越えるために共有された言語、伝統、血統のなかに土台を求めざるをえない想像上の統一性を表現していたのである。（中略）ドイツにおける国民意識はその文化と血統の特異性という情念－ドイツ人の自己理解に永続的に刻まれた特殊主義－に結びつけられたのである。[8]」とドイツ人の国民意識を批判している。このような文化的多様性を擁護する主張がある中で、メルツはその反対派の一人として前述したような主張をしたのである。さらに時を同じくして、メルツの主張に賛同を示す形でキリスト教民主同盟（以下CDU）が発表した移民委員会報告書の中では「われわれのドイツ国民（Nation）としてのアイデンティティは共通の歴史、言語、文化から形成されている。[9]」とされている。つまり、この流れから解釈できることは、ドイツは多文化が共存する国家ではなく単一文化からなる国家である、もしくはそのような国家を目指すべきだ、という趣旨のもとにメルツを中心に「主たる文化」の主張がされたのである。この是非を巡り政治家や知識人たちによる論争が始まったことを考えると、主たる文化論争におけるドイツの自己像は、多文化に対する姿勢をまだ定めていない「われわれドイツ人」という姿を見ることができる。具体的に言うと、現状のドイツが多文化社会であるのか否かという認識、そして文化的多様性を承認していくのか否かという政策の指針において正反対の主張がされ続けている。2000年にこの論争が始まり、その後明確な結論が出なかったにもかかわらず、2005年にノルベルト・ランメルト（Norbert Lammert）が主たる文化論争の再開を提案している[10]ことからも、このことがわかる。しかし、「主たる文化」の主張が外国人敵視である、曖昧であるとの批判を受けながらもその後も議論が絶えないことを考えると、移民や統

合問題を通して自文化と他文化と分けるように自己と他者を再考することそのものが、現在のドイツに必要とされているのだということがわかる。移民という「他者」の存在を意識することによって、また、「主たる文化」の主張によって、彼らを受け入れる側のドイツ人が「われわれドイツ人」の「ドイツ的」な文化がどのようなものであるのか、あるいはドイツの国家像について再考するきっかけとなった。そして同時に、「文化」という概念への問題提起にもつながっている。主たる文化論争が、世界の諸文化をいくつかの文化へと単純にカテゴリー化し、「ひとつの文化」や「ひとつのアイデンティティ」として認識することが可能なのかという問いかけにもなったと言える。

以上のことから、ドイツの「主たる文化」の定義付けやその存在が曖昧なために、主たる文化論争の中から「ドイツ像」を掴もうとするとその姿は不鮮明になってしまうが、文化的多様性という観点から「ドイツ像」を見てみると、多文化の是非を巡って対立している姿が浮き彫りになり、また自己の文化を再考している姿があらためてわかる。

「主たる文化」の主張のように多文化社会に反発する主張は様々な形で唱えられるが、ではなぜ「ドイツ的」な文化への説明を求められると明瞭な応えが出されないのであろうか。まず考えられるのはナチズムの影響である。自己と他者を明確に区別し「ドイツ」や「ドイツ人」としての自己像を明確に表明し移民に強制することは、ナチス政権下で理想とされていたユダヤ人やシンティ・ロマを排除した民族共同体を彷彿させるとして、避けられてきた傾向にあると考えられる。しかし、幾度となく「主たる文化」の主張や多文化社会に反対する主張が繰り返されるということは、ドイツ人が「文化」にこそ自分たちのアイデンティティを見出そうとしている現れであり、そこに自己像を確立しようとしていると言うことができる。それを端的に表したものが、CDUの移民委員会報告書の中で述べられているような「共通の歴史、言語、文化」なのであろう。

では、ナチズムの影響を受けていないドイツ帝国やワイマール共和国時代のドイツの自己像はどのようなものだったのか。簡単に歴史を振り返ってみたい。例えば、ビスマルク（Bismarck）によるドイツ統一が進められた時代を見てみると、1872年にはプロイセン国内においてポーランド語を教える学

校を閉鎖しドイツ語を教える学校を設置することによって、言語による「ドイツ化」を図る動きがあった。さらに、ビスマルクはカトリック教会の影響を抑圧するために宗教（カトリック）を超えた国家形成を試みている。このビスマルクのカトリック教会に対する抑圧的な政策をウィルヒョー（Virchow）が「文化闘争（Kulturkampf）」と呼んだように、この時代のドイツ帝国では宗教だけでなく言語や文化をも含んだ「ドイツ化」政策が行われた。その一方では、オーストリアを除いてドイツ統一を図ろうとした、いわゆるビスマルクの「小ドイツ主義」を批判したことで有名なコンスタンティン・フランツ（Constantin Frantz）は、異なる文化や言語を持つ民族が平等の権利を有する連邦的な編成が望ましいと唱え、多様性に価値を求めている[11]。このフランツの主張はドイツ統一に際して反映されることはなかったが、様々な民族や宗教の存在を認めていたプロイセンも含んで成立したドイツ帝国は言うまでもなく多民族国家であった。このフランツの主張は現代の移民と多文化社会を巡る問題や議論に通じる面がある。多様性に価値を見出すか否かの議論は歴史を振り返ってみても存在していたことがわかる。そして、その後の近代国民国家が形成される前までのヴィルヘルム時代においては、民族自決運動が台頭し、共通の言語と血統を基盤とした「民族（Volk）」の理念が叫ばれるようになった。この血統主義の理念は1980年に制定された国籍法[12]にも受け継がれている。そして、血統主義を守り続けるか出生地主義を取り入れるかという国籍取得条件を巡る議論は1990年の外国人法[13]改正と2000年の国籍法改正の際にも見られる[14]。もっとも民族自決の流れは、ドイツに限らず第一次世界大戦後のヨーロッパでは主流であった。このように、宗教や言語、文化を基盤とし「ドイツ」という国家の形成が図られたことは、歴史的に繰り返されてきたとわかる。程度の差はあれ、どの時代においても国家形成において宗教、言語、文化は重要な構成要素であった。それゆえに、「ドイツ人」という自己像の形成においてもこれらの要素が重要な位置を占めていることは容易に察しがつく。このような歴史的な流れを踏まえると、移民という他者を受け入れることになった今日のドイツにおいて主たる文化論争が起こったことは、ある意味では当然の帰結という見方ができる。では、主たる文化論争以後の政治的な言説空間ではどのような自己像と他者像が見

えてくるのかを、引き続き考察していこう。

主たる文化論争を経て2004年に改定された移民法[15]の改正は、ドイツが「移民国」として転換したきっかけとも言えるが、この法改正に伴い2005年に開始された統合コースでは、移民が統合コースを受ける義務があるとされていることから移民は他者であると解釈することができる。統合コースはドイツ語とドイツの法律や規則を学ぶ授業構成になっていることから、言語に重点が置かれていることがわかる。つまりは、移民がドイツ語を習得することによって「統合」が促進され、ドイツ語を習得すればドイツの同胞として認めるとされている。よって、ここでは言語を基準に自己と他者を区別する意識が存在している。統合コースにおける自己像と他者像の分析は続く第Ⅱ章で行うので、ここで詳細に述べることはしないが、移民にドイツ語の習得を義務付けたことによってドイツの統合政策が同化的要素を強めたとの見方もあり、その賛否もあるが、ある一面では目指す「ドイツ像」がより明確になったと言える。見方を変えれば、「主たる文化」のような曖昧な定義付けをするのではなく、実際のドイツ社会で生活していく上で必要なもののひとつがドイツ語だと位置づけることは、ドイツ人と移民が共存していくという点では現実的であると言える。ドイツ語を母語としない者に「外国語としてのドイツ語（DaF）」だけでなく、「第二言語としてのドイツ語（DaZ）」を教授しようとする動きも、この一例だと言える。ドイツ語を「外国語」として移民に教授することは、移民を他者とし距離を置いているように見受けられる。しかし、移民や移民を背景にした人々の母語保持を認めたうえで「第二言語」としてドイツ語を教授するという姿勢からは、共存していこうとする意志を見ることができる。これらのことを踏まえると、主たる文化論争とは異なったドイツの自己像をここに見ることができ、言語が「ドイツ人」という自己像、さらには他者像を形成するために必要であると認識されていることがわかる。

では、ザラツィンの著書『自滅するドイツ』（2010）やその論争を見てみよう。主たる文化論争や統合コースでは、移民、つまりドイツへの移住者全体を他者と見做していた。しかし、ザラツィンは著書の中でイスラームが統合を妨害する要因であると批判している。批判する対象を「移民」と一括り

にするのではなく、「イスラーム」に的を絞っている点で、主たる文化論争における他者像とは決定的に異なっている。そして、イスラーム系移民の失業率の高さや進学率の低さなどの統計を具体的な数値で示すことによって、彼の主張は、その真偽はさておき、科学的に根拠づけられているかのような印象を与え説得力を増している。何が「主たる文化」であるのかという定義付けができず曖昧であった主たる文化論争に対して、「構図的」には単純明快で分かりやすい主張である。そのためか、彼の著書は100万部を超えるベストセラーとなり、彼の主張を支持する政治家や知識人も多くいた。例えば、社会学者のネクラ・ケレク（Necla Kelek）もその一人である。ケレクは、ザラツィンの著書が出版される前ではあるが、イスラーム批判を繰り返すザラツィンの主張は真実であると支持を表明し、トルコ系とアラブ系移民の統合の状況が悪いと指摘している。さらに、移民の子供たちがドイツ語を学ぶことを我々が望むなら就学前教育を義務付け、子供たちが学校に通わないのであれば子女手当を渡すべきではない。移民の第四, 五世代の統合も最初から開始しないのであれば、最終的には強制結婚を禁止する法律を作るべきだと提案している[16]。他にも、シュピーゲル（der Spiegel）やツァイト紙（die Zeit）、フランクフルター・アルゲマイネ紙（die Frankfurter Allgemeine）などの雑誌や新聞では、ザラツィンの著書とその主張に対して連日特集を組み、検証を試みている[17]。これは彼の主張の影響力が大きかったことを顕著に示している。このように注目されたのは、彼が移民や文化的多様性に寛大であったSPDの議員であったことも要因のひとつであろう。

さらに、彼はこの著書とは別に2010年８月29日のヴェルト紙（die Welt）のインタビューで、イスラームだけでなく、ユダヤ人は特定の遺伝子を持っているなどと人種主義ともとられる発言をしたことで[18]、さらなる論争の激化を招いている。もっとも、この発言に対して政治家やユダヤ人協会などから批判を受けたことは言うまでもなく、ドイツ連邦銀行理事の職を辞する結果につながっているように、遺伝子に関する発言に関しては支持を得ることは困難であった。いずれにしても、ユダヤ人やイスラームを絶対的な他者としていることが明らかに見て取れる。歴史的な流れと同じく、文化や言語に続き、宗教によっても自己と他者を区別する現象が繰り返し起こっているこ

とが、ここからも明らかにわかる。ただし、「キリスト教」と「それ以外の宗教」という区別ではなく、あくまでも「イスラーム」と「それ以外」という意識が存在している。しかし、このような現象は特にドイツに限ったことではない。例えば、反イスラームを表明している有名な政治家にはデンマークの国民民主党（Dansk Folkeparti）党首であるピア・クラスゴー（Pia Kjærsgaard）やフランスの政治家ジャン＝マリー・ル・ペン（Jean-Marie Le Pen）などがいる[19]。遺伝子に関する発言に関しても、かつてアメリカで批判され議論を呼んだ『The Bell Curve』[20]の主張やノーベル賞受賞者のジェームズ・ワトソン（James D. Watson）が人種間に遺伝子の優劣があるとした発言[21]などを彷彿させる。それゆえに、ザラツィンの主張は「新鮮」で驚くような発言ではないのだが、2004年の移民法改正によってようやく「移民国」としてスタートをきり「統合」へ向かい始めたドイツを再びスタート地点へと逆戻りさせてしまったかのような印象を与える。彼の主張からは、イスラームを単純に他者と位置づけるだけでなく、極めて否定的で排他的な他者像を描いていることが見て取れる。

確かに、イスラームを絶対的な他者と見做す風潮は中世からヨーロッパのアイデンティティ形成の底流をなしていることはエドワード・サイード（Edward W. Said）の『オリエンタリズム』を挙げるまでもなく、よく指摘されている事実である。イスラームに対する固定観念は根強く、政治から芸術にいたるまでしばしば再生産されている。もちろん、これはドイツにも当てはまるのだが、自己像形成の中で他者としてのイスラームが大きな役割を果たしているのは最近の現象である。これは、ドイツでの急激なムスリムの増加（ザラツィンによれば、今日のドイツには６～700万人のムスリムがいるとされている[22]）という可視的な要因と2001年のアメリカ同時多発テロの影響によるムスリムへの嫌悪感という心理的な要因が背後にあることが考えられる。イスラームという他者を認識することによって、「ムスリムではないわれわれ」と自己を認識するように相対的に自己像を形成している姿がここからは浮き彫りになる。「ムスリム＝他者」と「ムスリム以外＝自己」いう構図を明確に描き出すことによって、「反イスラーム」と「イスラームに寛容派」が対立するドイツ像も浮かび上がってくる[23]。

以上のように、ザラツィンの著書とその論争はイスラームを絶対的な他者とし、イスラームを起点に反対と容認で揺れているドイツ像が見て取れた。そしてそこにはイスラームへの偏見が随所に見られ、否定的な他者像が存在していたことがわかった。

主たる文化論争からザラツィン論争までの政治的な言説空間を概観してきたが、他者は常に移民であり、言語や文化、宗教によって自己と他者を区別する意識が働いていた。他者と位置づけている移民の中でもイスラームに対しては、特に否定的なイメージが存在している。そして「ドイツ人」という自己形成、あるいはドイツの国家像の形成においても、ドイツ語や「ドイツ的」な文化を求める姿勢がうかがえた。しかし同時に、言語や文化、宗教を基準として「ひとつのドイツ」を築こうと唱えられる一方で、移民を否定的な他者と捉えるのではなく、移民の背景にある多様性を容認し共存することでドイツが成り立っている、もしくはそのようなドイツを築いていこうとする姿勢もある。つまり、2005年の移民法改正から「移民国」としてスタートしたドイツではあるが、政治的には移民との関係性について確固たる姿勢が定まらず、まだ議論しつくされていない現状が浮き彫りになった。このような政治的「揺らぎ」が統合コースの現場ではどのような影響を与えているのか、次章で検討していきたい。

Ⅱ. 教育現場におけるドイツの自己像と他者像

ドイツ連邦移民難民局による『構想』[24]と『カリキュラム』[25]

それでは、政治的な言説空間から教育現場に視点を移してみよう。2005年に施行された移民法に伴って設置された統合コースでは、「滞在許可（Aufenthaltserlaubnis）」や「定住許可（Niederlassungserlaubnis）」のある移民に参加する権利が与えられ、その権利を有する移民のうちドイツ語能力の不十分な移民には参加が義務付けられている。この統合コースは、基礎的なドイツ語能力を養成する語学コースとドイツの法律、政治、歴史や文化などの、いわゆるドイツ事情を学ぶオリエンテーションコース（Orientierungskurs）から成りっているただし、十分なドイツ語能力がある場合は、オリエンテーションコースのみの参加も可能とされている[26]。成人教育である統合コース

の二つの大きな特徴は、教育期間が（学校教育に比べて）極めて短いこととドイツ全体を対象にした国主導の仕組みになっていることである。本稿では、ドイツの自己像と他者像の分析を目的にしているので、ドイツ事情を学ぶことに重点を置いているオリエンテーションコースを対象に考察を進めていく。ドイツ事情の教授は、オリエンテーションコースでは45コマ（1コマ＝45分）でまとめて行われているが、ドイツ人（またはドイツの教育制度内で教育を受けている移民の子供）向けの学校教育では義務教育の9年間（高等学校卒業の場合、13年間）で、「歴史」、「政治」、「国語」など、様々な科目にいわば分散した形で行われている。さらに連邦制度のドイツでは、教育主権が州（Land）にあり、その教育原則や指針が州によって異なっているが、統合コースの理念とドイツ人向けの学校教育の間にはどのような差異もしくは共通点があるのかという対比分析は、本稿では割愛することにした。

2005年に始まった統合コースへの全体的な評価がドイツ連邦内務省（Bundesministerium des Innern）の指示のもと、2006年に行われた。（調査は「Ramboll Mangement」という政府外の機関に委託された。）この結果と「統合コースを改善する」というワーキンググループの助言、さらには滞在法の改正に基づいて、2007年12月5日に「新しい統合コース指令」が下された。これを踏まえて、ドイツ連邦移民難民局は『構想』の改訂版[27]を発行した。ここにはオリエンテーションコースの趣旨が簡潔に書かれており、統合コースを運営していく「目標」と「内容」をより詳細に説明している『カリキュラム』と共に、統合コースの仕組みや意図を理解するうえで最も重要な資料となる。

では、この中身を見てみよう。オリエンテーションコースの主な「目標」として、「ドイツの国家機構に対する理解を呼び起こす」、「ドイツ国家に対する肯定的な姿勢を養成する」、「住民や国民としての権利と義務に関する知識を伝える」、「ドイツでの今後の生活を方向づけるための能力を養成する」、「社会生活に積極的に参加できるための能力を養成する」、「異文化理解能力を養成する」の六つの項目[28]を挙げている。そして、その「内容」として、「オリエンテーションコースでは、日常生活に関する知識とドイツにおける法秩序・歴史・文化に関する知識が伝授される。ドイツ連邦共和国の民主主義的

な国家体制の理解と法治国家・男女平等・寛大・宗教の自由という原則に特に重点を置いている。[29]」と、説明されている。

まず、上記の文言から日常生活に役立つ情報と政治システムの教授がオリエンテーションコースの主な目標であることがよくわかる。しかし、「日常生活に関する知識」とは何を指すのだろうか。政治システムの重要な原則を「法治国家・男女平等・寛大・宗教の自由」と列挙しているのに対し、「日常生活に関する知識」には具体例が欠けている。さらに、「目標」の説明でも具体的な例が極めて少ない。例えば、「ドイツ国家に対する肯定的な姿勢を養成する」の説明として、「ドイツ社会の基礎的な価値とドイツ連邦共和国の政治システムや法秩序を知ってもらうことにより、移民のドイツ国家に対する肯定的な姿勢を促し、新しいアイデンティティ形成の機会の提供を目論む。」とある。「政治システム」と「法秩序」は明確な「形式」を成しているが、「ドイツ社会の基礎的な価値」とは何を指すのか。ここでも具体的な例が一切挙げられていない。「政治システム」と「法秩序」を並列することによって、「基礎的な価値」も同じように、明確で定義可能な概念であるかのように見える。しかし、主たる文化論争が示したように、「ドイツ社会の基礎的な価値」を巡って激しく意見が対立し、全ての政党が合意できるような定義付けはもはや不可能と言えるのが現状である。論争が下火になってからも、「主たる文化」の概念は風刺の対象であり続けている[30]。『構想』で「基礎的な価値」について具体的に定義付けされていない原因のひとつは、主たる文化論争を再燃させない配慮がそこにあるためと考えられる。

さらに興味深いのは、六つの項目の中では「ドイツの文化（Deutsche Kultur）」という概念が、一度も使われていないことである。「内容」の中では「ドイツにおける文化（Kultur in Deutschland）」という文言があり、「文化」を修飾する形容詞として「ドイツ」という単語を用いるのではなく、ただ単に「ドイツにおける」という範囲を示す表現であり、結果として、「文化」は「ドイツ」によって定義されず、この言葉から特定の解釈をすることができなくなっている。そして、『カリキュラム』では、次のように説明されている。「開かれた文化概念に基づいて、内容的な重点はドイツにおける日常空間に置かれている。伝統的な文化の理解は特に排除されているわけではないが、

二義的な位置にある。[31]」また、「多様性の教授は文化的な基準と思われている事柄の教授より優位である。[32]」と強調されている。開かれた、革新的な文化概念はドイツでは主に緑の党とSPDが推し進めてきたものであり、伝統的かつ保守的な文化概念はCDU/キリスト教社会同盟（以下、CSU）によって伝唱されてきた。政治的に対立しているこの二つの文化概念が上記の文章に包括されている。ここには当時のCDU/CSUとSPDからなる大連立政権の政治的状態が端的に示されている。ドイツで長年放置されてきた移民統合政策の必要性が政治的な対立を乗り越えて、共通認識となっていることを示している。

『構想』と『カリキュラム』では、「ドイツの文化」という表現が敬遠されている原因のひとつとして考えられることは、前述したようにナチスの影響がある。ナチ時代において、「ドイツの文化」がスローガンとして悪用されたという「負」の歴史が背景にある。第二次世界大戦後、旧西ドイツでは、戦後生まれの世代によってホロコーストという無二の犯罪が意識され、「その責任を負わないといけない者」として自己像が形成されてきた。それに従い、主として左派にはナショナル・アイデンティティに対する不信感が根付き、いわゆる「否定的なアイデンティティ」、つまり、ドイツ人であることに対して誇りを持てないという現象が生じた[33]。それに反発し、右派は愛国主義を興隆させようとしてきた。ナショナル・アイデンティティの極端な否定と肯定のぶつかり合いが旧西ドイツの政治思想を特徴付けてきた。主たる文化論争において、「文化」を巡る意見の対立も、『構想』と『カリキュラム』においての「ドイツの文化」という用語の回避も、その延長線にあると言ってよかろう。

では他者像を見てみよう。『構想』において、「方法」の説明の中には、「多様性に富んだ練習形態[34]は、授業における学習プロセスの中で参加者はパートナーであり、自分の学習プロセスに積極的に関われることを保障する。」とある。ここからは、移民が対等な「パートナー」として想定されていることが読み取れる。他にも同様な点がある。例えば、「目標」のひとつとして掲げられている「住民や国民としての権利と義務に関する知識を伝える」という項目では「移住者が持っている権利を知ることは統合の重要な条件であ

る」とあり、「ドイツでの今後の生活を方向づけるための能力を養成する」という項目では「自立して知識を取得する能力も極めて重要だ」とある。「パートナー」や「自立」というキーワードが示すように、ドイツ人と移民の上下関係を思わせるような表現が避けられている。同化という言葉も使われず、「ドイツ国家に対する肯定的な姿勢を養成する」という項目の説明では「アイデンティティ形成の機会（Identifikationsmöglichkeiten）を提供する」という「やわらかい」表現が使われている。ここで注目に値するのは「機会」が複数形で用いられていることである。なぜなら、ここからは多様なアイデンティティ形成も認めているのだという解釈ができるからである。つまり統合コースは「ドイツ国家に対する肯定的な姿勢の養成」と「目標」に掲げているが、その方法は一枚岩的な同化的強制ではなく、移民がそれぞれ、ドイツ社会において自分に合う「居場所」を見つけることを手助けする形をとっていると、ここからは解釈できる。この他にも、「社会生活に積極的に参加できるための能力を養成する」という項目では「ドイツ社会への参加の機会（Partizipationsmöglichkeiten）」という表現があり、ここにも同様に複数形が用いられている。また、移民の義務に関する記載には「全ての住民（jeder Einwohner）」、つまり、移民だけではなく、ドイツ人も対象とされており、「ドイツ人」対「移民」という二項対立を乗り越えた表現がある。「異文化理解」の項目でも「この能力は全ての住民にとって大事だ」とされている。こういった表現から分かるように、『構想』と『カリキュラム』では統合コースが移民にドイツ語やドイツ事情を一方的に押し付ける形とならないような配慮がされている。これは前述した「開かれた文化概念」とも繋がっている。ここには、ザラツィン論争で浮き彫りになったような否定的な他者像、あるいは、イスラームを敵視する姿勢は見られない。

以上のことから、『構想』と『カリキュラム』では、自己像でも他者像でも、極めて「政治的に正しい（politically correct）」立場をとっており、「評論」のレベルで見られたような、イスラームに対する先入観や偏見、または「上からの目線」の存在は確認できない。しかしその反面、「政治的に正しい」姿勢をとるあまりに、『構想』と『カリキュラム』が具体性に欠けていることは否めない。政治システムなどに関する「ハード」な面は明確であるが、価値

や日常生活の習慣など、普段「文化」という概念で束ねられている事柄に関する「ソフト」な面については、ほとんど明記されていない。それゆえに、『カリキュラム』と『構想』をどのように解釈するかは、統合コースで使用される教材を作成する出版社の判断に委ねられることになる。その結果、各出版社から作成される教材の特徴が異なるのである。よって、次に各教材の特徴を考察していくことにする。

オリエンテーションコースの教材

オリエンテーションコースの教材の検定は、ドイツ連邦内務省の選定によって組織された評価委員会[35]が行っている。ドイツ連邦移民難民局のホームページには、その検定を経た七冊の教科書がリストアップされている。フーバー（Hueber）社、コルネルゼン（Cornelsen）社、クレット（Klett）社、ランゲンシャイット（Langescheidt）社などの「外国語教育・外国語としてのドイツ語」の分野で多くの書物を出版してきた大手出版社とユーディツィウム（Iudicium）社が、それぞれ教材を作成したことは、統合コースの重要性を示している。さらに、コルネルゼン社とクレット社は、二種類の教科書を発行している。リストアップされた教科書のうち、ユーディツィウム社発行の『共生（miteinander leben）』は現在絶版中のため、四つの出版社から発行されている教科書を中心に分析をしていく。ただし、コルネルゼン社とクレット社からは二冊ずつ発行されているので、ドイツ連邦移民難民局の基準により忠実に従っている教科書を各一冊だけ選び、以下の四冊[36]を分析対象としたい。

1）『オリエンテーションのために―ドイツの基礎知識』マックス・フーバー社（*Zur Orientierung. Basiswissen Deutschland*. 2. aktualisierte Auflage. Max Hueber Verlag, 2006.）
2）『プラスの得点・ドイツ語－オリエンテーションコース』コルネルゼン社（*Pluspunkt Deutsch – Der Orientierungskurs*. Cornelsen Verlag, 2006.）[37]
3）『45時間ドイツ』エルンスト・クレット社（*45 Stunden Deutschland*. Ernst Klett Verlag, 2008.）[38]
4）『オリエンテーションコース。ドイツにおける歴史・社会的制度・生活』

ランゲンシャイット社（*Orientierungskurs. Geschichte – Institutionen – Leben in Deutschland*. Langenscheidt Verlag, 2005.）

前述したように、これら四冊はドイツ移民連邦難民局が出した方針に基づいて作成されているが、『構想』と『カリキュラム』の理解は出版社の判断に委ねられているので、その違いが随所に表れている。教科書の内容だけでなく、表紙からもその違いがはっきりとわかる。では、表紙も含め、それぞれの特徴を比較検討していこう。

表紙の比較

まず、2006年に初版を出したフーバー社とコルネルゼン社の教科書の表紙を比較してみよう。フーバー社の表紙には国会議事堂の屋上ドーム、風景（畑と木）、古い町並みとフランクフルトの高層ビルの写真が載っている。国会議事堂の屋上ドームはドイツ統一と民主主義国の象徴として読み取れるが、これらの写真から伝わってくる全体的なイメージは、伝統と近代、自然と都市を融和している国・ドイツといった、普通のガイドブックとあまり変わらないものである。移民国・ドイツというイメージはここからは伝わってこない。一方、コルネルゼン社の表紙には人物の写真だけが載っている。腕を組み、互いに笑い合う黒髪と金髪の女性、微笑みながら電話をかけている黒髪の女性、そして教室と覚しき場所で勉強している、同じく黒髪の男性と女性の写真である。写真に関する説明がないのでさまざまな解釈ができるが、黒髪の人物が移民、腕組みをしている二人の女性の姿が移民とドイツ人の友情を表していると考えられる。二番目と三番目の写真は、移民の自立、移民の勉強に対する意欲、向上心を象徴しているものとして読み取れる。確かに、移民は髪が黒いというステレオタイプ的な見方ではあるが、コルネルゼン社は移民をパートナーとして捉える『構想』の理念に忠実であり、それを視覚化していると言えよう。これに対して、フーバー社の表紙は、移民と関係なく、陳腐とも言えるドイツのイメージを与える。これは一見して、政治的中立性を保っているようだが、その一方で、移民に「居場所」を与えないものにも見て取れる。

一方、2008年にクレット社が出版した教科書の表紙は移民と直接関係ない写真だけが載っている。これはフーバー社の教科書と共通している点である。写真は、ベルリンの壁を壊す男性、国会議事堂の屋上ドーム、そして大人に肩車をされている「ドイツ（Deutschland）」と「13」と書いてあるスポーツシャツを着た子供の後ろ姿が写っている（おそらく親子）。最初の二枚は民主主義的なプロセスで統一されたドイツを表し、『構想』にもある民主主義的法治国家・ドイツという公式な自己像を表している。また、写真と共に教科書の副題として「政治・歴史・文化」という三つのキーワードも載せられている。「文化」という言葉が表紙に載せられているのは、四冊の教科書の中で、クレット社だけである。国会議事堂の写真が「政治」、ベルリンの壁が「歴史」を表現していると考えるなら、子供の写真は「文化」を視覚化するものになるが、そのメッセージ性は極めて曖昧である。ひとつの解釈としては、新しい愛国心の表れだと読み取ることが可能であろう。なぜなら、スポーツシャツから2006年にドイツで開催されたサッカーのワールド・カップが連想できるからである。その際、多くの人（右翼でない「一般人」）がドイツの国旗を掲げたことに注目が集まり、ドイツ国内外のメディアはドイツ人がついに集合的な罪悪感を克服し、肯定的な自己像に辿りついたと好意的に評価した[39]。この背景を考慮すると、子供の写真は「可愛らしい＝怖くない愛国心」を表していると読み取ることができる。

さらに、ランゲンシャイット社は2005年に出版した教科書以外に、2007年に別の教科書も出版している。前述した『オリエンテーションコース。ドイツにおける歴史･社会制度･生活』はオリエンテーションコースのための（ドイツ国内の）教科書であるが、2007年出版の教科書はドイツ国外向けのドイツ語学習者用に作られたもので、『オリエンテーションコース･ドイツ。歴史･文化･社会制度（Orientierungskurs Deutschland. Geschichte – Kultur – Institutionen）』という副題が付いている[40]。『オリエンテーションコース』という題名ではあるが、副題にはドイツ国内向けのものと異なり「文化」という言葉が用いられている。教科書の表紙の写真もまた異なっている。ドイツ国外向けの教科書では、詩人ゲーテとシラーの記念碑とキリスト教教会（ミュンヘンの聖母教会）の写真があり、「ドイツの文化」を視覚化している。し

かし、ドイツ国内向けの教科書では豊富な文学を誇る文化国とイメージできるような写真とキリスト教という側面が削除されている。ドイツ国議会議事堂の写真がどちらの教科書にも同様に載せられているが、ドイツ国内向けの教科書には教会の代わりにブランデンブルク門を背景にベルリンの壁に乗っている人々の写真がある。そして、その国会議事堂とベルリンの壁の写真の間に、移民と思しき家族の写真がある。まるでドイツの政治と歴史に挟まれているかのような印象を受ける。両教科書とも九章から成り、１章から８章までは全く同じであるが、第９章が異なっている。ドイツ国内向けの教科書では移民にとって重要な「教育と再教育」について、ドイツ国外向けのものは「文化」がテーマとなっている。

このドイツ国内外向けの教科書の違いは、対外的に誇れる側面が必ずしも内的な側面と一致していないという点、ひいては外的な自己像と対内的な自己像のズレが、移民国として自己を再認識し始めたドイツのジレンマを表していると言える。ドイツ国外向けに発信している「ドイツの文化」は、今日のドイツ国内ではもはや通用しないであろう。なぜなら、ゲーテとシラーは移民にとって（おそらく多くの若いドイツ人と同様に）、「アイデンティティ形成の機会」を提供するものではなく、また、キリスト教を強調することは、ドイツのムスリムの排除に繋がりかねないからである。クレット社とコルネルゼン社の教科書が二冊ずつ選定されているのに対し、ランゲンシャイット社が2007年に出版した教科書が検定されなかった理由は、このようなことも背景にあるのであろう。『カリキュラム』でも露わになった文化概念の革新的な側面と保守的な側面が、ランゲンシャイット社の二つの教科書には端的に現れている。伝統的かつ保守的な文化概念はドイツ国外向けの表紙のデザインに反映され、ドイツ国内向けの教科書には移民を含めた新しい文化概念を反映している。ただし、その新しい文化概念は無難な表現にとどめられ、宗教に関する写真は削除されている。

以上見てきたように、四冊の教科書の表紙は『構想』の特徴を反映していることがわかる。コルネルゼン社の教科書を除く三冊の教科書は国会議事堂の屋上ドームの写真を載せることで、『構想』でも強調されている民主主義国家・ドイツを表象している。しかし、『構想』ではあまり明記されていない、

「文化」に関する「ソフト」な面の表象は、出版社によって異なっていることがわかる。それでは、続いて教科書の中身を見ていくことにしよう。

教科書の中身

移民をドイツに統合させるという目的を掲げている統合コースでは、アイデンティティ形成のための一方的な他者作りとは異なり、「他者＝移民」に「自己＝ドイツ人」を理解してもらい、他者と自己の溝を埋めることを目的とするという特徴がある。このような特徴が教科書の内容にどのように反映されているのかを見てみよう。

まず教科書に掲載されている写真やイラストに着目してみると、クレット社の教科書にはドイツの国旗が小さく描かれているスカーフを被ってニコヤカに笑っている女性の写真がある（70頁）。国旗がちょうどこの女性の頬のあたりに位置しているこの写真こそ他者と自己を融和している、いわば統合の理想像を表していると言えよう。また、全身を覆うブルカを着ている女性（＝移民）とミニスカートをはいている金髪の女性（＝ドイツ人）が眼鏡を交換するイラストがある（59頁）。これらは「相互理解」を視覚化するイラストだが、移民をイスラームの女性として表象している。これは、ドイツでは「イスラーム＝他者」が決まりきったイメージになっていることを端的に表したものである。第Ⅰ章でも述べたザラツィン論争のように、現在のドイツではイスラームを他者として認識する風潮があり、クレット社の教科書にもこの傾向が見られる。イスラームが主としてスカーフを被る女性によって表象される背景には1998年に起こった「スカーフ論争」がある。アフガニスタン出身の女性が教員採用試験に合格したものの、教室でもスカーフ着用を希望した理由で、雇用を拒否された事件に端を発したこの論争は、ドイツの社会に「異」をどれだけ容認するべきかという課題を突きつけると同時に、「異」をイスラーム、特にイスラームの女性に固定化させる側面も持った[41]。

しかし、その風潮にもかかわらず、全体として、それぞれの出版社は教科書に様々な背景を持つ移民を登場させ、「移民」の多様性を考慮し、特定のグループを他者としては扱っていない。受講者をパートナーとして扱おうとする姿勢が窺える。ドイツに関する情報を教授しつつ、受講者同士が議論す

るための課題が多く盛り込まれている。このようにして一方通行や押し付けの姿勢を防ごうとはしているが、課題の設定によっては、「移民」対「ドイツ人」という二項対立をかえって助長する場合もある。例えば、ランゲンシャイット社の教科書の49頁では、「ドイツ人への質問（Fragen an die Deutschen）」という題名で、移民がドイツ社会に対して抱いている（とされる）様々な疑問を一問一答形式で記載している。この一例を挙げると、「女性は男性のように働くべきではない。ドイツでは女性が一人で暮らしたり、結婚しなかったり、子供がいなかったりするのはなぜか。」という問いに対して、「法律では、女性は男性と同等の権利がある。これは、ドイツでもヨーロッパ全体でも同様である。」という答えがある。文法問題を解答する語学的な課題から、「コースの中で相手を探し、一緒に話してください。どの答えは納得できるか、どの答えに対して違和感を覚えるか。様々な意見を聞くことができるように話す相手を二回変えてください。」というコミュニケーション中心の課題に進む設定になっている。受講者が様々な意見を発見することが狙いであるが、ドイツ人の間でも様々な意見があるということは反映されず、結局「ドイツ人」対「移民」という構造が固定されてしまうことになる。そもそも、「ドイツ人への質問」という題名には、「ドイツ人（die Deutschen）」に定冠詞「die」を冠することによって、ドイツ人をひとまとめにし、移民と対比している。この構造は定冠詞の削除で簡単に避けることができたはずが、ここではあえて、ドイツ人と移民の違いを強調している。では、その「ドイツ人の答え」に違和感を覚えた受講者はどうすればよいのか。本格的な異文化コミュニケーションが始まりかけたところで、課題は終わってしまう。クレット社の教科書の問題設定も同様な「構造上の鈍感さ」がある。ドイツ事情の説明に引き続き「あなたの故国の場合はどうですか」という問いかけが非常に多くある。ドイツと受講者の故国の比較は、教育学的意義はあるが、ドイツ国籍取得を目指している者にとって「ドイツ」対「故国」という対比が果たして必要であるのかという点が疑問として残る。

このような盲点が「ドイツにおける文化」に関する記述の困難さを表している。規則や慣習を教授することを目的としつつ「主たる文化」のような押し付けを避けるという条件に対して、各教科書は様々な工夫をしているが、

全てが成功しているとは言い難い。例えば、フーバー社の教科書は、ドイツにおける行動様式をクイズ形式で教えようとしている（53頁）。ユーモアを込めて、ドイツにおける「日常的なルール」を教える試みではあるが、ドイツ的（とされている）行動パターンは「正しい」、逸脱は「間違い」という設定をすることによって、やはり一方的に移民に規範を見せつけることになる。これに対し、コルネルゼン社は、開かれた文化概念を貫いている。４～５頁に「ドイツのイメージ（Deutschlandbilder）」（複数形）という題名で、様々な写真を掲載している。例えば、宗教関係の頁ではキリスト教の礼拝だけではなく、イスラーム教のモスク内の写真もある。５頁には「何がドイツ的？」という題名で、インターネット・フォーラムからの答えを引用し、ドイツの「負」の歴史や豊富な文学に触れることで、ドイツの様々な側面を紹介している。さらにドイツ国籍を取得した移民のコメントも含むことで「ドイツ人」対「移民」という二項対立を見事に回避している。ドイツの社会生活に関する記述も、それを「正しい」と押し付けず、「変だと思うルールはありますか」という問いかけをすることで移民に違和感を持たせる余地を与えている（31頁）。

このように、教科書間で最も異なる点は表紙と同様にやはり「ソフト」な面だということがわかる。政治システムに関する記述は、重点の置き方が少し異なっているものの、どの教科書も『カリキュラム』に明記されている三つのユニット（ユニット I: 民主主義の政治、ユニットII: 歴史と責任、ユニット III: 人間と社会）に忠実な章建てをし、ほぼ同じである。

以上のことをまとめると、統合コースは、政治的なシステム（「基本法と法秩序」）の理解を促すことに重点を置き、「ドイツにおける文化」の教授は、一方的な押し付けではなく、相互理解を促進するためのものであり、開かれた文化概念に基づいている。このような文化概念について、ドイツ連邦議会の顧問などを務めている元大学教授・ディーター・オベルンデルファー（Dieter Oberndörfer）は次のように述べている。「移民に文化的同化、つまりドイツ人化を要求するなら、全ての国民にとって拘束力のあるドイツ文化の定義付けが可能だということを、前提とすることになる。しかし、ドイツの歴史や最近のドイツ国内の主たる文化論争が示すように、それは不可能である。基本

法と法秩序のみが拘束力のあるドイツにおける文化の枠組みなのである。[42]」この見解は、統合コースの『構想』や『カリキュラム』と一致している。『構想』と『カリキュラム』に沿って作成された教科書も、この方針に追随している。議論をする課題を取り入れることで、意見交換を促す仕組みになっている。ただし、その仕組みに、「移民」対「ドイツ人」という二項対立の助長など、いくつかの落とし穴も存在していることが本稿で明らかになった。

他にもいくつかの問題が挙げられる。例えば、統合コースの授業の中で受講者間の議論が起きない、または議論からケンカに発展してしまうなど、その方針に沿った授業運営が成り立たなければ、どうすればよいのか。ここで重要になるのが統合コースを実際に担う講師の存在である。『構想』では、講師の役割に関して次のように説明されている。「統合コースの教授法は、全ての学習者や学習の状況に合致した教育学的な王道はないという認識に基づいている。講師の役割は全ての参加者に各自の能力や条件に合った学習を可能にする場を作ることにある。そのために、講師には、グループ学習の中で参加者に自律的学習を促進したり調整したりする能力が求められている。[43]」このように、現場の教育に携わっている講師に相当な能力を要求していることがわかる。しかし現状は、大半の講師が非常勤という不安定で低報酬の契約で働いている[44]。他にも、統合コースに参加したくても空きがないという理由で参加できない、交通費の補助が十分ではないので参加できない[45]、あるいは、コースレベルの不適合や託児施設の不足などの問題があり[46]、理論と現実のズレが存在している。

では、このような統合コースをどのように評価できるのだろうか。長年、移民研究に携わってきたクラウス・バーデ（Klaus Bade）は次のように指摘している。「統合に関する研究は実際、摩擦や非統合の調査に重点を置いている。（中略）しかし、いくらそういった例外的に失敗した統合とそれに伴う時には危険をはらんだ結果の研究が主な対象であっても、総合評価をする際、通常の概ねうまくいっている統合を度外視してはならない。[47]」この指摘が統合コースにも転用できる。『構想』と『カリキュラム』または教材に改善の余地は確かにあるが、全体として政治的に正しいと評価できる。移民をパートナーとして扱おうとする姿勢は一貫して、ザラツィン論争に見られ

るような、否定的な他者と肯定的な自己の構築は、ここには存在しない。自己と他者との間に強い境界線をひいている現在の並存社会を克服するためには、有力な仕組みだと言えよう。

結論

以上のことから、政治的な空間で議論される移民問題や統合問題と実際の統合コースの運営の場ではギャップがあることが明らかになった。政治的な立場により、「ドイツの文化」や「ドイツ社会」のあるべき姿に関する見解が異なるため、論争が起こること自体は民主主義の健全な表れだと言える。しかし、主たる文化論争やザラツィン論争が示すように、政治家の極端な発言は時に必要以上に注目され、「実態」とかけ離れていることがある。このことは、2010年10月21日のZeit onlineでも次のように批判されている。「首相が繰り返し多文化主義の終焉を唱えたことを受けて、（政府は）新しい法律でこの方針をはっきりと示そうとしている。これからは統合拒否を一層厳しく処罰するようだ。（中略）ところが、内務大臣トーマス・デ・メズィエール（Thomas de Maizière）（CDU）は今になってようやく、各州が統合コースにまじめに参加しない者に対してどのような政策を実施しているかを、調査する予定である。残念ながら、これは現在の統合を巡る議論の典型的な経緯である。つまり、まず（政治家による）辛らつな発言があり、その後に実態調査が行なわれる。（中略）統合コースを考案しているドイツ連邦移民難民局は、こういった風潮に相当驚いている。（中略）統合コースを中退している人もいれば、受講しない人もいるのは確かである。病気、妊娠、就職と理由は様々である。―しかし就職は（統合の）成功の側面だ。本格的な統合拒否もあるが、これは決して目立った問題ではない。（中略）ドイツ連邦移民難民局は、ザラツィンの著書が引き起こした世論をあおるような議論からは距離を置いている。ドイツ連邦政府の発言とは反対に、むしろ現在はトンネルの向こうに光が見えてきたというのが、ドイツ連邦移民難民局の見解である。[48]」このように政治的な評論と現場のズレを指摘する報道もある。政治家による過激な発言は選挙戦を控え戦略的に過激な主張をするためでもあり、さらにその発言を「キャッチフレーズ」的に取り上げ報道するマスメディ

ア側の意図も背後にある場合がある。しかし、そのような政治家や知識人たちの発言は、実際に統合コースを運営していくうえで問題になっている点（参加したくても空きがなくて参加できない、託児所がないなど）を覆い隠し、本質的な問題の解決を困難にしてしまうことは明らかである[49]。

このように、政治家や知識人たちによる論争や評論が移民の統合の現状を必ずしも正確に捉えているわけではないので、ドイツでの移民問題や統合問題を考察する際、政治的な側面と現場を絡ませ対比することが必要不可欠であると指摘しておきたい。

注

1　本稿は渡邉紗代とベティーナ・ギルデンハルトの共同執筆であるが、Ⅰ章は主に渡邉、Ⅱ章は主にギルデンハルトが担当した。

2　Leitkulturの定訳はまだなく、「主導文化」、「指導的文化」や「基幹文化」と訳されることはあるが、Leitkulturの主張やその論争の特徴を考慮し本稿では「主たる文化」という訳語を用いている。詳細は、渡邉紗代「ドイツにおけるLeitkultur論争への一考察」『大阪大学言語文化学』Vol.17、2008、213-225頁、を参照。

3　2000年10月18日のRheinische Postに掲載された発言。http://www.rp-online.de/public/article/aktuelles/politik/253144（2011年10月５日閲覧）

4　ティロ・ザラツィン（Thilo Sarrazin）の著書『自滅するドイツ（Deutschland schafft sich ab）』Deutsche Verlags-Anstalt, 2010の出版をきっかけに移民と「統合」を巡り起こった論争。この論争については、前田直子「ドイツ移民統合政策のゆくえ―ザラツィン論争をきっかけとして―」『獨協大学ドイツ学研究』Vol.64、2011、53-93頁、が詳細に紹介している。

5　今回は教材を中心とした分析を行ったが、今後の現地調査では関係者（受講者、教師、コース運営者など）にインタビューを行い、教育現場の様々な側面を調べる予定である。

6　ドイツ連邦統計庁による統計。http://www.destatis.de/jetspeed/portal/cms/Sites/destatis/Internet/DE/Navigation/Statistiken/Bevoelkerung/MigrationIntegration/MigrationIntegration.psml（2011年12月26日閲覧）

7 ユルゲン・ハーバーマス「民主的立憲国家における承認への闘争」チャールズ・テイラー，ユルゲン・ハーバーマス，エイミー・ガットソン他（佐々木毅，辻康夫，向山恭一訳）『マルチカルチュラリズム』岩波書店 1996、203頁。

8 同書、203-204頁。

9 CDU移民委員会報告書の序文１頁。http://www.jum.baden-wuerttemberg.de/servlet/PB/show/1142470/m_ller_kommission__abschlu_bericht_28.4.01_.doc.pdf（2011年10月５日閲覧）

10 2005年10月20日にDie Zeitが行ったランメルトへのインタビュー。http://www.zeit.de/2005/43/InterviewLammert（2011年10月５日閲覧）
2005年12月13日にDie Weltにランメルトが書いた記事。http://www.welt.de/print-welt/article183928/Auch_die_EU_braucht_ein_ideelles_Fundament.html（2011年10月５日閲覧）

11 フランツの思想については、板橋拓己「ドイツ問題と中欧連邦主義―コンスタンティン・フランツを中心に―」『北大法学論集』第７巻６号、2007、277-312頁、に詳細な分析がある。

12 正式名称「国籍法（Staatsangehörigkeitsgesetz, StAG）」

13 正式名称「外国人の入国および滞在に関する法律(Gesetz über die Einreise und den Aufenthalt von Ausländern im Bundesgebiet vom 9. Juli 1990)」、通称「外国人法(Ausländergesetz-AuslG)」

14 移民の国籍取得条件を緩和するために出生地主義を取り入れるのか、血統主義を貫くのかという議論が行われた。詳細は、渡邉紗代「ドイツにおける『移民』統合政策とその諸問題―多文化共存と並存のはざまで―」2008年博士論文、大阪大学、を参照。

15 正式名称「移民の管理と制限、および連合国民と外国人の滞在の規制ならびに統合に関する法律（Gesetz zur Steuerung und Begrenzung der Zuwanderung und zur Regelung des Aufenthalts und der Integration von Unionsbürgern und Ausländern vom 30. Juli)」通称、「移民法（Zuwanderungsgesetz）」

16 2009年10月22日のSächsische Zeitungの記事。http://www.sz-online.de/nachrichten/artikel.asp?id=2294086（2011年11月21日閲覧）

17 各メディアの報道については、前田直子（2011）が詳細に紹介している。

18 2010年８月29日にDie Weltが行ったザラツィンへのインタビュー。http://www.welt.de/politik/deutschland/article9255898/Moegen-Sie-keine-Tuerken-Herr-Sarrazin.html（2011年10月５日閲覧）

19 クラスゴーは、ムスリムによってヨーロッパが侵略されるなどとして反イスラームを表明し、ルペンは反ユダヤ・移民排斥主義を掲げてきた元国民戦線（Front national）の党首である。

20 Richard J. Herrnstein, Charles Murray:*The Bell Curve*. Free Press. 1994　社会問題や経済格差、教育水準などとIQの関係性をデータで示し、認知的な能力が遺伝子によってきめられていると紹介し、批判を浴びることになった。

21 2007年10月14日にイギリスでThe Sunday Timesのインタビュー中に、黒人の遺伝

子は白人よりも劣るなどと差別的な発言をしたことで話題となった。

22 Sarrazin (2010), S.262.

23 この二つの傾向はトルシュテン・ゲラルド・シュナイダーズ（Thorsten Gerald Schneiders）編集の『イスラーム崇拝―批判がタブーになる時（*Islamverherrlichung. Wenn die Kritik zum Tabu wird.*）』VS Verlag, 2010と『イスラーム敵視―批判の境界線があいまいになる時（*Islamfeindlichkeit. Wenn die Grenzen der Kritik verschwimmen*）』2., aktualisierte und erweiterte Auflage. VS Verlag, 2010、で詳細に紹介されている。

24 正式名称『ドイツ連邦全土にわたる統合コースのための構想（Konzept für einen bundesweiten Integrationskurs）』2005（以下『構想（Konzept）』）

25 正式名称『ドイツ連邦全土にわたる統合コースのためのカリキュラム（Curriculum für einen bundesweiten Integrationskurs）』2005（以下『カリキュラム（Curriculum）』）

26 統合コースの仕組みは丸尾眞「ドイツ移民法における統合コースの現状及び課題」『ESRI Discussion Paper Series No. 189』2007、小林薫「ドイツの移民政策における『統合の失敗』」『ヨーロッパ研究』（東京大学大学院総合文化研究科・教養学部ドイツ・ヨーロッパ研究センター）Vol 3、2009、119-139頁、奥田誠司「ドイツにおける移民統合政策―言語教育を中心に―」『独逸文学』（関西大学独逸文学会）Vol 54、2010、203-210頁、早坂圭一「ドイツにおける移民統合政策―2005年の移民法を中心に―」『国際コミュニケーション論集＝ Kyklos: international communication』Vol 8、2011、17-32頁、で詳しく紹介されている。

27 『ドイツ連邦全土にわたる統合コースのための構想（改訂版）（Konzept für einen bundesweiten Integrationskurs (überarbeitete Neuauflage)）』, 7.（以下Konzept）

28 a. a. O., 24-25.

29 a. a. O., 25.

30 最近の例として、「Almanya」という映画（2011年）に次のようなシーンがある。トルコの出稼ぎ労働者がドイツ国籍を取得する前夜に悪夢を見ている。その夢の中で、ドイツの公務員は「まもなくドイツ国民になる者として、ドイツの文化を主たる文化として認めることを約束しますか。/ すばらしい！それは射撃クラブの会員になること、週二回豚肉を食べること、毎週「犯行現場」（というテレビドラマ）をみること、一年おきにマヨルカで夏休みを過ごすことを意味しています。」と言っている。「主たる文化」の本格的な風刺として2001年に出版された『ドイツの主たる文化の事典』（Wieczorek, Thomas (Hg), *Das Lexikon der deutschen Leitkultur*. Fulda, 2001）がある。

31 Curriculum, 11.

32 Ebenda.

33 旧東ドイツでは、社会主義＝反ファシズムという単純化によりナチスの犯罪が集団記憶においてはあまり大きな位置を占めなかった。Wolfgang Emmerich

(2003): *Deutschland*. In: Klaus Stierstorfer (Hg): *Deutschlandbilder im Spiegel anderer Nationen*. Rowohlt Taschenbuchverlag, 2003, S.48.

34 “Arbeits- und Sozialformen” (Konzept, 26). これは、グループワークやペア作業のことを指している。

35 ドイツの連邦移民難民局のHPによると、委員会は現場のエキスパート、学者、ドイツ連邦政府の代表者、ドイツ連邦移民難民局の代表者、各州の代表者、地方自治体の重要な団体の代表者、ドイツ連邦政府の統合代表委員からなっている。

36 2007年に『構想』の改訂が行われたが、全ての教科書は、その改訂を考慮して加筆・修正されたことはなく、増版されている。

37 コルネルゼン社のもう一つの教科書は『オリエンテーションコース―ドイツにおける政治・歴史・社会の基礎知識』（Orientierungskurs. Grundwissen Politik, Geschichte und Gesellschaft in Deutschland）である。出版社のＨＰには『プラスの得点・ドイツ語－オリエンテーションコース』に関して、ドイツ連邦移民難民局の『構想』の基準に忠実に作成されたとの説明がある。これに対して『オリエンテーションコース―ドイツにおける政治・歴史・社会の基礎知識』は、基準を見習って作成されている。つまり、統合コースのみならず、様々なドイツ語教育の場での使用が想定されている。そのゆえ、本稿では『プラスの得点・ドイツ語－オリエンテーションコース』を分析対象とする。

38 クレット社のもう一つの教科書は『35時間ドイツ（35 Stunden Deutschland）』である。コルネルゼン社と同じように、『45時間ドイツ』は統合コースのために作成された教科書であるが、『35時間ドイツ』は様々なドイツ語教育の場での使用が想定されている。よって、本稿では『45時間ドイツ』を分析対象とする。

39 Spiegel-online, 2006年６月18日：Deutschland in Schwarz-Rot-Gold. http://www.spiegel.de/kultur/gesellschaft/0,1518,422011,00.html（2011年11月21日閲覧）

40 ドイツ国外向けの「オリエンテーションコース」とは、統合コースの中の「オリエンテーションコース」を示すわけではなく、ドイツ語学習を含め、ドイツの歴史や文化、社会制度などを総合的に学ぶという意味合いを込めた「オリエンテーションコース」である。

41 ドイツのみならず、フランス、ベルギーなどでも起こったスカーフ論争は内藤正典、阪口正二郎（編）『神の法vs.人の法―スカーフ論争からみる西欧とイスラームの断層』日本評論社、2007、で詳しく分析されている。

42 Dieter Oberndörfer: Einwanderung wider Willen. Deutschland zwischen historischer Abwehrhaltung und unausweichlicher Öffnung gegenüber (muslimischen) Fremden. In: Thorsten Gerald Schneiders (Hg.): Islamfeindlichkeit. Wenn die Grenzen der Kritik verschwimmen. 2., aktualisierte und erweiterte Auflage. VS Verlag, 2010, 141f.

43 Konzept, 12.

44 2009年の調査では、統合コースの講師の平均的な報酬が１コマあたり18,35 ユー

ロにすぎないことが判明した。これに関して、2011年８月31日に緑の党の議員がドイツ連邦議会で質問し、改善を要求している。（Kleine Anfrage, Drucksache 17/6877）

45　Spiegel online,2010年９月22日：Sparwut der Regierung bremst Einwanderer aus. http://www.spiegel.de/politik/deutschland/0,1518,718855,00.html（2011年11月21日閲覧）

46　小林薫（2009）、127-128頁。

47　In: Klaus J. Bade und Hans-Georg Hiesserich (Hg.):*Nachholende Integrationspolitik, und Gestaltungsperspektiven der Integrationspraxis*. Beiträge der Akademie für Migration und Integration. Heft 11. V&R unipress, 2007, S. 24f.

48　2010年10月21日のZeit on lineの記事http://www.zeit.de/2010/43/Integration（2011年11月21日閲覧）

49　このことは、先行研究、例えば、小林薫（2009、132頁）でも指摘されている。小林は、ドイツで統合が失敗しているという否定的な評価の一人歩きに異議を唱え、「統合コース自体の改善、諸制度の改善、移民に対するホスト社会の意識、メディアの機能など移民政策が改善されることは当然である。しかしそれ以上に『統合の失敗』とは何かについて冷静に見直され、長期的かつ俯瞰的な視野で統合政策に取り組むことが『統合の成功』の第一歩であろう。」と締めくくっている。

Zusammenfassung auf Deutsch

Radikale Äußerungen von Politikern und Personen des öffentlichen Lebens prägen das – meist negative – Bild von Deutschland als Immigrationsland. Aus dem Blick geraten dabei oft die positiven Aspekte der im Alltag voranschreitenden Integration. Der vorliegende Aufsatz beschäftigt sich mit den Diskrepanzen, die zwischen dem von Polemiken beeinflussten politischen Diskurs und den realpolitischen und didaktischen Maßnahmen zur Integration bestehen. Mit besonderer Konzentration auf die Selbst- und Fremdbilder in Deutschland sowie deren historischen und politischen Hintergrund untersucht er zunächst die Leitkultur-Debatte und die Diskussionen, die um das Buch „Deutschland schafft sich ab“ von Thilo Sarrazin entbrannten. Die Ergebnisse werden in einem zweiten Schritt mit dem Konzept, dem

Curriculum und den konkreten Lehrmaterialien des 2005 eingerichteten Integrationskurses kontrastiert. Dabei wird deutlich, dass die Selbst- und Fremdbilder, auf denen der Integrationskurs basiert, sehr viel gemäßigter und politisch korrekter als die des politischen Diskurses sind, der in den Medien soviel Aufmerksamkeit genießt. Durch den Vergleich zweier meist separat behandelter Ebenen hofft der Aufsatz, zu einem tieferen Verständnis des komplexen Prozesses beizutragen, der sich zur Zeit in Deutschland bei seiner Neuformierung als Integrationsland vollzieht.

Between political and educational discourse
– images of the self and the other in Germany as an immigrant society

Keywords: Germany, immigrants, integration-course, images of the self and the other